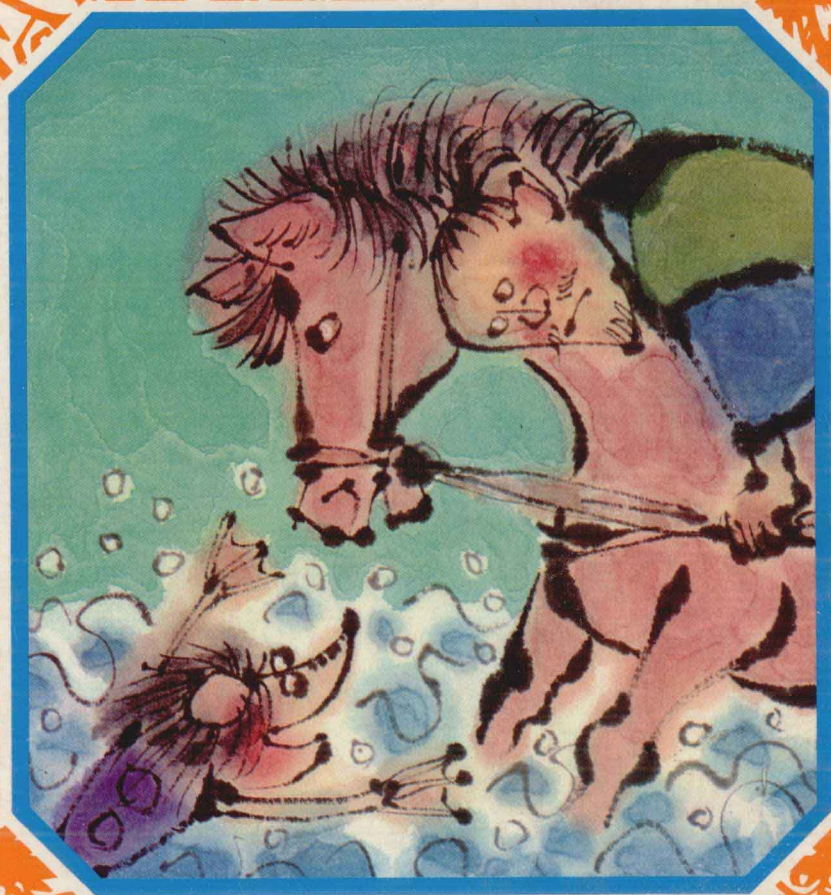


かっぱのきずぐすり

《かっぱの^{はなし}話》





筆者／宮脇紀雄

一九〇七年岡山県生まれ。日本児童文芸家協会理事。第七回野間児童文芸賞受賞。著書に「山のおんごく物語」「山かげの石」ほか多数。

画家／北島新平

一九二六年福島県生まれ。童美連所属。著書に「かっぱのかげぼうし」「こんごろう」「ふしぎないけ」「しなののぶんご」ほか多数。

母と子の日本の民話 10 かっぱの きずぐすり

著者 宮脇紀雄 ©1976 発行／集英社 堀内末男

162P 21cm N.D.C. 388 Printed in Japan

母と子の日本の民話*10*

かっぱの きずぐすり

みやわきとし お ぶん
宮脇紀雄・文

きたじましん べい え
北島新平・絵



集英社

刊行のことば

民話は、私たちの祖先が生活の中から生みだし、幾百年もの間、口から耳へ、親から子へと語りついできた民族のゆたかな生きた伝統です。このシリーズは、数多い民話の中からテーマ別に作品を厳選したものです。小学一、二、三年ごろの子どもたちが楽しく読めるように、文章・口絵・挿画など、原話のもつ素朴で大らかな味わいを生かすよう配慮しました。

巻末には、一流の民俗学者・研究者による各巻のテーマを解明したエッセーや、収録作の構造・作品論など、詳しく、分かりやすい解説を付けました。

監修
かんしゅう

民俗学者

作家
芸術院会員

都留文科大
文学博士
文学部長

編集協力
へんしゅうりょうりき

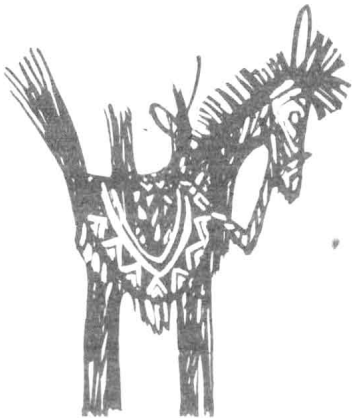
児童文学評論家

関敬吾
せきけいご

坪田譲治
つばたじょうぢ

和歌森太郎
わかもりたろう

西本鶏介
にしもとけいけ





ちやう
長へいさんは、きゅうり ぬすつとの かっぱの あたまを、思い
きり ぼうで たたきつけました。 (かっぱの おんがえし)

❀ みなさんへ

みやわき としお

あなたは、『かっぱ』というものを知っていますか。じっさい見たことはなくても、えやものがたりであつたことは、きっとおありでしょう。天ぐ、おに、山んばなどのように かっぱは、お話の中にだけ いる ものなのです。つよく なったり、また すごい やつに なったり、とんまものになたり、なかなか ゆかいな ものですよ。

ここに かっぱの 話を あつめました。

さあ、かっぱくんは、あなたの ともだちになれるかな。だめかな。



もくじ

かっぱの しょうもん 10

かっぱの すもう 23

かっぱつり 40

かっぱの きずぐすり 54

かっぱの おんがえし 62

九十九とうげ 79

ひょうたんとかっぱ 88





かっぱと あめ……………105

十間川^{とまがわ}のかっぱと むこうじま……………115

かっぱの たからもの……………128

かっぱの 生けどり……………140

《解説》

なぜかっぱにお皿があるか

……………武田静澄 149

「かっぱの話」をめぐる…西本鶏介 154



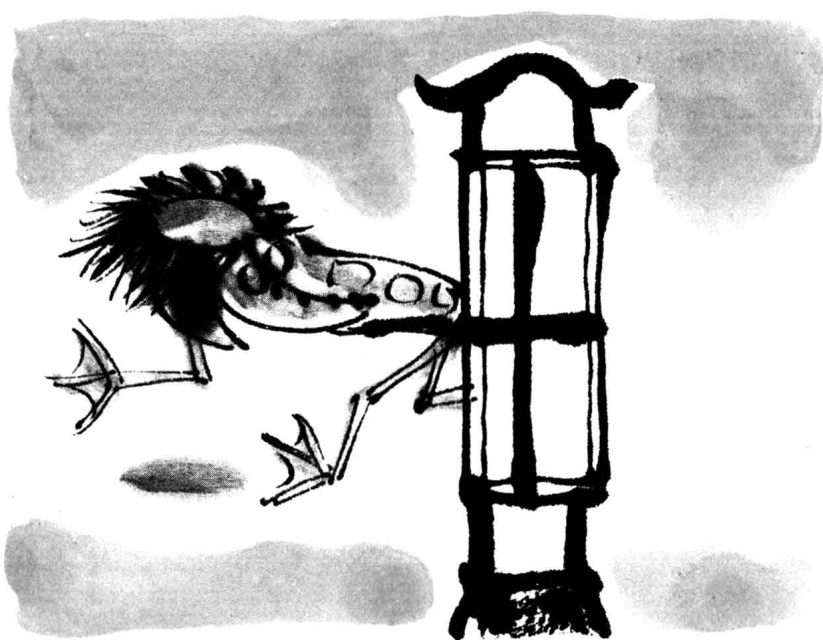
装幀
口絵
さし絵

赤坂三好
北島新平



かっぱの きずぐすり

みやわきとしお ぶん
宮脇紀雄・文



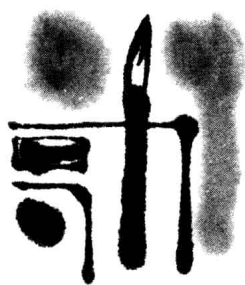
かっぱの しょうもん

水^{みず}が こぼれた

むかし、出雲^{いすも}の 国^{くに}(今^{いま}の 島根^{しまね}けん) 西川^{にしがわ}づ村^{むら}と いう ところに、かっぱが すんで おったのですよ。

かっぱと いうのは、なかなか おっかない やつ。 夕方^{ゆうがた}など おそくま

で 子^こどもが 川^{かわ}で あそんで いると、ふいにお





しりから、生きぎ
もを ひっこぬい
て しまうとい
うのですから。
ところで ある
日の ことです。
一ぴきの 馬が
川の 土手で、草
をくって おり
ました。草とい
うものは 水ぎ
わへ 行くほど

青^{あお}あおとして 水^{みず}みずしくて おいしいもの。

ぼりり ぼりり……。

知らず 知らず 馬^{うま}は、川^{かわ}の 水^{みず}ぎわまで、草^{くさ}を くって いきました。
しゅしゅーっ……。

へんな 水^{みず}音^{おと}が して、いきなり 川^{かわ}から とび出^だした ものが ありま
す。す早^{はや}く 馬^{うま}の 口^{くち}に つけて ある、たづなを つかみました。

なんと それが かつばだったんですよ。

かつばは つなを ひっぱって、

馬^{うま}を 川^{かわ}の 中^{なか}へ ひきこも

うと しました。馬^{うま}は

びっくり。

ひひーん。



いなないて
とび^あ上がりま
した。そうし
て どっと
かけ出^だしたの
です。

たいそう 力^{ちから}

の つよい
馬^{うま}だったから
たまりません。
さすがの
かっぱも



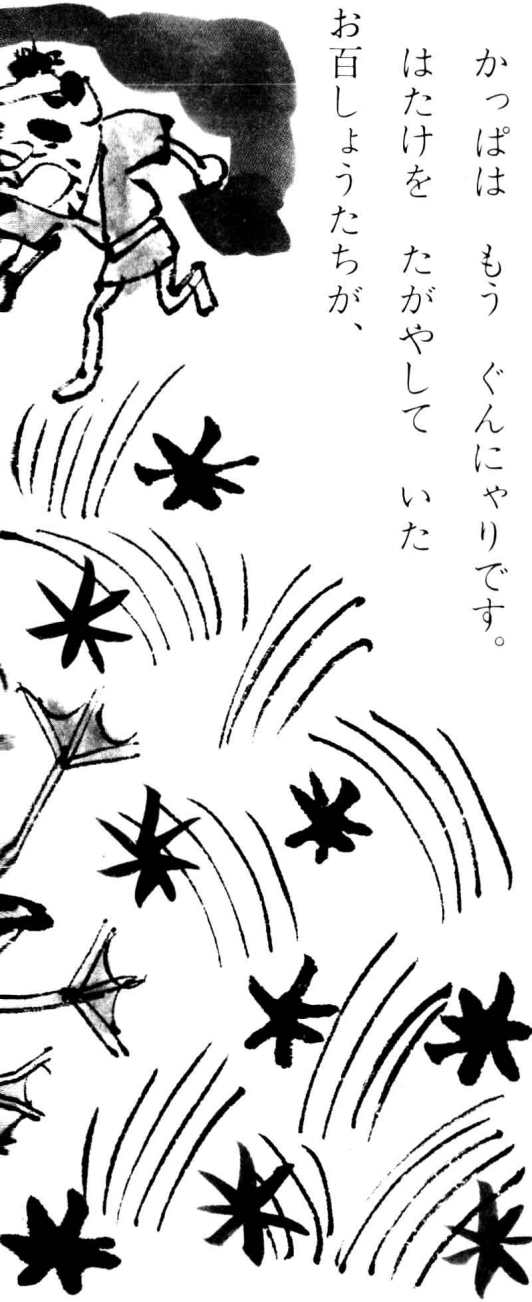
川^{かわ}へ ひきこむどころか、はたけの中^{なか}へ はね上^あげられてしまいました。
 もともと かつぱと いう ものは、あたまの 上^{うへ}に おさらが ついて
 いて、それに 水^{みず}が たまって いると、めっぽう つよいのです。けれど
 も その 水^{みず}が こぼれると、まるつきり よわ虫^{むし}に なります。

馬^{うま}に とばされた かつぱは、さらの 水^{みず}が こぼれて しまいました。
 「わあ、だめだあ。」

かつぱは もう ぐんにやりです。

はたけを たがやして いた

お百^{ひゃく}しようたちが、



「何^{なん}じやい、何^{なん}じやい。」

と、何人^{なんにん}も よって きました。

「かっぱじゃ、かっぱじゃ。」

「それ、とっつかまえろ。」

みんなで よって たかって、なわで しばりあげちやったんですよ。
「ヒエーッ……。たすけて くれえ……。」

かっぱは ひめいを あげましたが、
「こいつは わるい やつじゃ。人間^{にんげん}の 生き^いぎもを ぬくんじゃ。」

